東京再探訪 2024

2024 年 11 月

旅のチカラ研究所　植木圭二

九州在住の友人夫妻と東京都心、神津島、伊豆大島を 3 泊 4 日で巡ってきた。今回の訪問地は私にとっては再訪地ばかりだが、そこに行った意図、つまりプランニングの裏を書いてみた。

■一味違うこだわりの東京

今回の旅は私たち夫婦と、九州在住の TOU さんとその奥さんの 4 人旅になる。

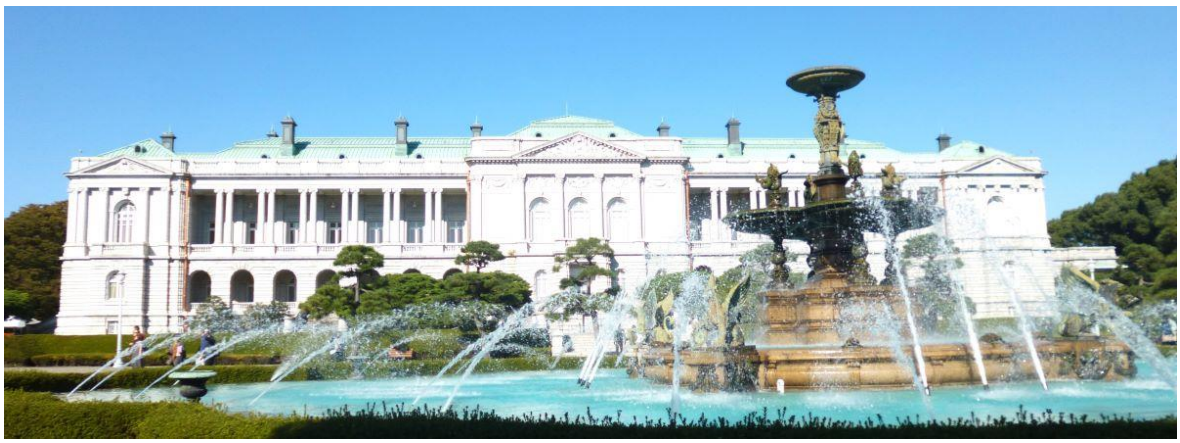
友人が遠方から上京する時には富士山や皇居などを案内するのが常だが、九州在住の TOU 夫妻は頻繁に上京しており、今さら富士山や東京見物でもない。

そこで遠方の人があまり行ったことがなく、東京を感じられて感動たっぷりの旅を計画した。

■迎賓館

感動という意味では、私自身が最近訪れて感動した「迎賓館」がある。迎賓館が東京にあることは知っていても、実際に中に入って見学した人は意外に少ない。地方にはない首都東京ならではの場所と言っていいだろう。

私たちは四谷駅で待ち合わせして、予約の参観証を見せて入場する。X 線の荷物検査を受け、撮影禁止・飲食禁止などの説明を聞き、国宝の噴水の傍に集まる。TOU 夫妻はもちろん、私の妻も初めてなので、案の定 3 人はこの段階で相当驚いている。



【迎賓館とその国宝の噴水】

まずは和風別館の見学になる。ここは日本の和の美徳が詰まっている。例えば陽光が水面に反射して水面の“ゆらぎ”が建物の軒下や天井に映るが、季節によって陽光の角度が変わるから、冬は建物の奥までゆらぎが映り、季節感を楽しむという凝った設計になっている。

そんな話を聞いて、私もそうだったが、3 人は単なる驚きから感動に変化したようだ。

【和風別館　水面の反射した“ゆらぎ”が見える】

明治時代に東宮御所として建てられた西洋式の本館はまるでベルサイユ宮殿で、この建物も国宝に指定されている。その前後の庭も実に素晴らしい。

3 人はカルチャーショックを受けているようで、作戦が見事に成功したと言っていいだろう。

尚、迎賓館については旅行記「迎賓館の見学 2024」に書いており、そちらをご覧いただきたい。

■東京の郷土料理、深川丼

東京でしか食べられない料理、東京のソウルフードとは、いったい何だろうか。

もんじゃ焼きは東京の月島に店が多いが、関東一円で食べられており、お好み焼きの元なので大阪や広島にもある。

そんな時ヒントになるのは、東京がまだ江戸と呼ばれていた頃のことだろう。現在の江東区付近は深川浦と呼ばれ、潮が引くと貝が豊富に獲れる漁師町だった。そして郷土料理の“深川丼”が生まれた。

深川丼はネギとアサリを味噌で煮て、その汁ごとご飯にかけた丼だが、現在はそのような丼以外にアサリの炊き込みご飯もある。調べてみると汁ごとご飯にかけた丼を深川丼と呼び、炊き込みご飯を深川めしと称するのが一般的らしい。

清澄白河の食事処「釜匠」は、深川丼と深川めしの両方が食べられるので、私たちは迎賓館の感動をそのままに清澄白河に移動して入店する。

深川丼と深川めしを注文し、夫婦でシェアして食べる。深川丼は大量のアサリを卵黄、油揚げ、ネギが盛りたてて実に美味い。深川めしもアサリの量が半端でなく、いい味を出している。

【深川丼】

【深川めし】

TOU 夫妻は「こんなにうまいとは、でももうこれ以上は無理・・・」と言いながらも既に完食している。そして私たち夫婦も完食する。

■東京の島に渡る

今回は東京都でありながら地方からの観光客があまり行かない珍しい場所ということで東京の島に行く計画を立てた。東京に島があることは知っていても、地方の人たちは大都会に憧れて上京するのであえて不便な島に渡ろうとはしない。そこが案外、盲点かもしれない。

東京の島々は東京湾から離れて伊豆半島の先に位置しており、それゆえ伊豆諸島と呼ばれている。明治時代初期（1878 年）静岡県から当時の東京府に移管されて、既に 150 年経っている。

最近、東京都は伊豆諸島に小笠原諸島を加えて“東京諸島”と呼んでいる。確かにそれは理にかなっているが、東京諸島ではいかにも都会の匂いがして、ちょっと寂しい。

■豪華な特等船室

夜の 9 時 30 分、東京竹芝桟橋から伊豆諸島行きの東海汽船の大型貨客船「さるびあ丸」に乗り込む。この船は 2020 年就航で、まだ新しいので船内設備も充実しておりとても綺麗だ。

そして今回は最高級の特等船室を予約している。

入室すると、室内は上品でコンパクトにまとまっている。さすがにクイーンエリザベスや飛鳥Ⅱなどの豪華客船には及ばないが、定期航路の貨客船にしては申し分ない。

妻も私と一緒に豪華客船に何度か乗っているが、この特等船室には満足しているようだ。そして TOU 夫妻も私たち以上に満足している様子だ。

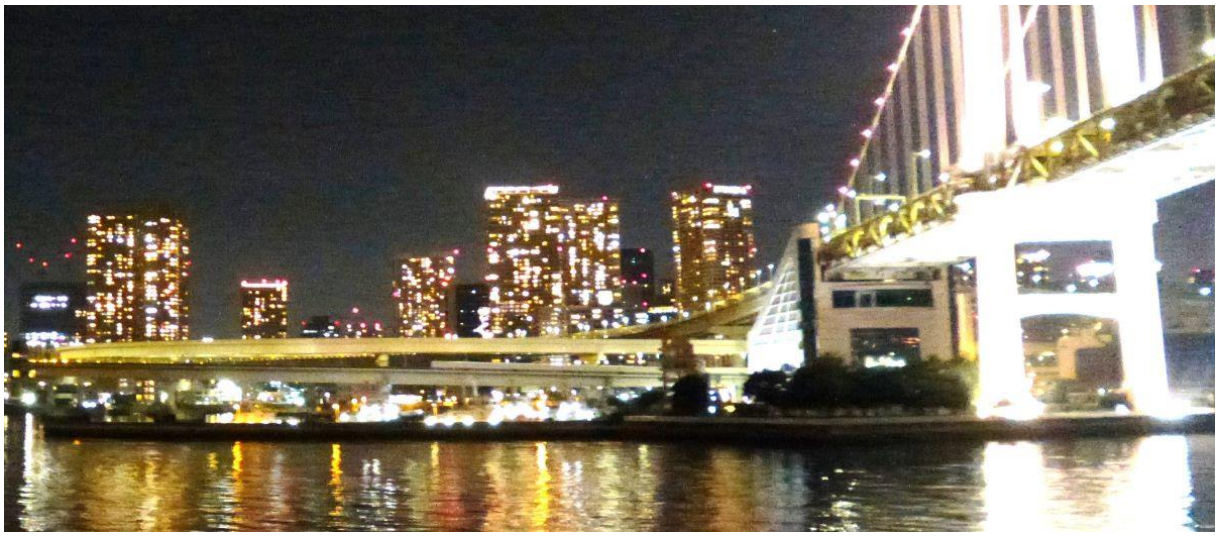
【さるびあ丸の特等船室】

しかしながらこの特等船室は1人1泊24080円もする。豪華客船のように食事が付いていないから割高感は否めないが、カプセルホテルのような特2等船室でも12900円するので、それを考えれば決して高くはないだろう。

ところが私は東海汽船の株主なので同行者全員が35%割引の15660円で乗ることができる。この特典は大きい。株主にならずとも金券ショップで株主優待券を買うという方法もある。

■東京湾の夜景

夜10時に竹芝桟橋を出港する。東京の夜景を見る機会は多々あるが、東京湾の海上から夜景を見る機会はそんなに多くない。レインボーブリッジを車で渡れば見ることもできるが、そのレインボーブリッジの下を通過する船から見る夜景は圧巻だ。



【レインボーブリッジと東京の夜景】

レインボーブリッジから離れるにつれて、その橋を挟むように左にオレンジ色の東京タワー、右に青色のスカイツリーが見えてくる。新旧2つのタワーに見送られて東京湾を後にする。

東京湾からの夜景は屋形船やナイトクルーズ船などに乗れば見ることができるが、それらの船は沿岸を航行するために東京湾の真ん中や湾の外には出ない。ところが外洋定期航路の船は沿岸を離れて東京湾の外に出る。そこまで来ると、今度は星が綺麗に見えてくるからたまらない。

特等船室から夜景そして星空を堪能する。旅の初日は実に素晴らしい夜になる。

■なぜ、神津島

船は朝10時に神津島に接岸し、私たちは上陸する。

それにしてもなぜ神津島なのか。私がイチ推しの島としているのがその理由だが、そんな曖昧なことでは多くの人は納得しないだろう。

伊豆諸島には有人島が9島あるが、神津島はそれらの真ん中に位置しており、適度の“離島感”がある。本土からそれなりに離れているために海が綺麗で、魚もたくさん獲れて美味しい。山があって、温泉があって、星空も綺麗という魅力たっぷりの島になっている。

さらに追加すると、神津島は、昔は“神集島”と書いていた。
神は伊豆半島の先に島々を創り始め、手始めに初島、そして神津島を創った。神津島を拠点に北に 3 島（新島、利島、大島）、南に 3 島（三宅島、御蔵島、八丈島）創った。各島に神々を配置し、神津島はそれらの神々が集まる島になった。つまり神代の昔から伊豆諸島の中心だった。

伊豆諸島は 9 島あると書いたが、あとの 2 島の式根島と青ヶ島が出てこない理由は、旅行記「伊豆諸島の旅 2021」、「伊豆諸島の旅Ⅱ2022」を読んでいただきたい。

【神津島の港　前方は天井山】

■2 時間待ちの村営バス
神津島の島内は村営バスが運行している。これを利用すると手軽に島内観光ができる。
私が 3 年前に来た時は船の欠航によって神津島で足止めをくらったが、村営バスで島内各所を巡ることができた。
今回もそのイメージで来島したが、村営バスは 2 時間に 1 本しかないことが判明する。従ってある観光名所に行くとそこで 2 時間待つということになってしまい、最低でも 3 カ所を巡りたいという私の思惑から外れてしまう。

そこで奇策としてタクシーとバスを併用すれば、何とか行けそうなことがわかる。
観光協会でそのことを話すと、対応してくれそうなタクシー会社は 1 社しかないらしい。そこに電話を掛けて、タクシー1 台をお願いする。

タクシーに乗り込み、早速運転手と交渉する。現地に着いたら 20 分くらい待ってもらうことをお願いするが、用事があるといって断わられる。聞くと、父親と 2 人でやっているタクシー会社で、父親は村営バスの運転をしているから他に運転手はいないとのことだ。

■美しい多幸湾
とりあえずタクシーを走らせて、私が伊豆諸島の中で最も綺麗だと思っている「多幸湾」にやって来る。そしてタクシーは直ぐに帰ってしまった。
多幸湾は青い海が綺麗で、その表現に困ってしまうほど素晴らしい。突き抜けるような青い海に、白い砂浜や白い山肌が対照的で実に美しい。

前回来た時は船が欠航するくらいなので天気が悪かったが、今回は快晴に近く海の青さが際立っている。「さすがに神津島まで来ると青さが全く違うね！」と TOU さんは感激している。私たちは海岸に腰を下ろしてしばらくの間、その景色に見入って時を過ごす。

【多幸湾をバックに私たち 4 人】

しばらくして村営バスが来る。バスに乗り込み、私はバスの運転手にタクシーに乗ったことを話す。すると「あれは息子で、今日は午後から休みさ」と言っている。

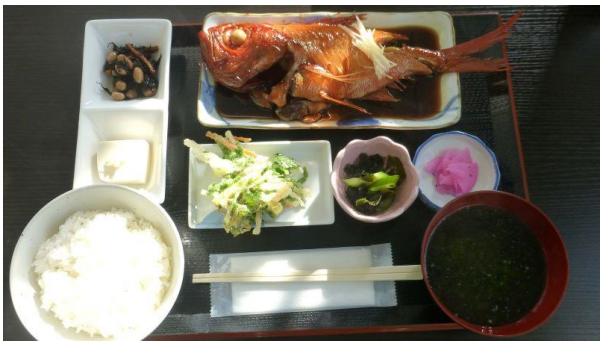
午後の観光で、あと 2 カ所行こうとすると、タクシーをもう 1 回使わないといけない。私はバスの運転手に「他にタクシー会社はないの？」と聞くと、運転手は「ないこともないが・・・、俺が昼飯を早めに食べてタクシーで送ってやるよ」と嬉しいことを言ってくれる。

■漁協婦人部の食堂

昼食は港の「よっちゃーれセンター」の食堂に入る。ここは漁協の婦人部がやっているのでその日の朝に獲れた新鮮な魚が出てくる。

前回来た時に食べた金目鯛の煮つけ定食の味が忘れられずに今回も食べるつもりだったが、まだ 12 時 40 分なのに売り切れている。仕方なく漬け丼を注文するが、これはこれで美味しい。

【今回食べた漬け丼】



【3 年前に食べた金目鯛の煮つけ定食】

■遊歩道の続く赤崎海岸

昼食後、タクシーで「赤崎遊歩道」に送ってもらう。もちろんタクシー料金を支払う。

赤崎遊歩道は赤崎海岸に作られた全長約 500m の木造遊歩道で、遊歩道の展望台からは式根島、新島、利島が見える。遊歩道には飛び込み台も設けられており、夏は飛び込みを楽しむ子供たちや若者たちで賑わう定番スポットになっている。

妻は、今度は孫たちを連れて来たいと言っている。孫たちの喜ぶ顔が目に浮かぶ。

【赤崎遊歩道　左上が展望台、手前の両側に飛び込み台】

赤崎遊歩道に約 40 分間滞在して、再び村営バスに乗る。もちろん村営バスは先ほどのタクシー運転手が運転している。

運転手は村の観光行政に文句を言っている。「旅館が少ないのにキャンプ場を閉鎖して、泊り客が減ってしまった。役場は何も考えていない」と、実は前回来た時も同じことを聞いた。

■太平洋を見ながら入る温泉

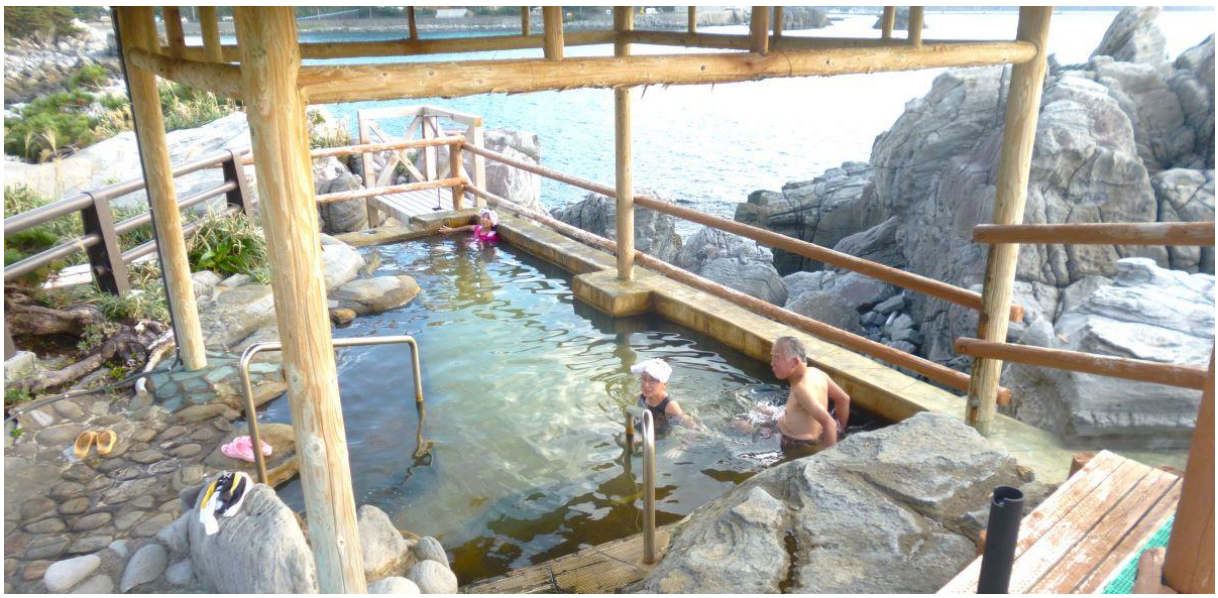
村営バスを「温泉保養センター」で降りる。次のバスが来るまで 2 時間の入浴になる。

温泉保養センターは日帰り温泉施設で、裸で入る男女別の内風呂と水着で入る混浴の露天風呂がある。露天風呂は小露天風呂、大露天風呂、展望露天風呂がある。私が知り限り、ここの大露天風呂が伊豆諸島最大の大きさを誇っている。残念ながら本日は大露天風呂には湯が張っていない。さすがにシーズンオフで仕方ないか。

4 人で展望露天風呂に入り、太平洋を見ながら混浴を楽しむ。

TOU さんは「10 代、20 代の頃に来たかったなあ」と言っている。私が相槌を打つと、女性陣は「その頃なら別の人と来たわよ」と言わんばかりだ。

ちなみにこの施設は夜 8 時まで開いているから、星空を見ながらの入浴もできる。神津島は東京都の星空保護区に指定されており、「島まるごとプラネタリウム」を売り文句にしている。



【展望露天風呂】

■和のもてなし、豪勢な料理

今宵泊まる山下旅館別館は、前回来た時もお世話になった宿で、島内で温泉が楽しめる唯一の旅館だ。宿は港に面しており、部屋から港に沈む夕日が見える。部屋は小綺麗な 12 畳の和室で、夫婦 2 人で泊まるには広すぎるくらいだ。

昨夜のコンパクトな特等船室と比べて、本日は広々とした和のもてなしという対比も面白い。

夕食は島で獲れた魚を中心に実に豪勢だ。煮魚、焼き魚、刺身に加えて、アサリの酒蒸しとタコの酢の物、心太（ところてん）もある。サラダだと思って食べたら、その下に魚のフライがあった。まさしく海の幸のオンパレードになっている。

これは文章で表現してもしょうがないので、写真を見てヨダレを呑み込んでもらうしかない。

【山下旅館別館の夕食】

■伊豆大島へ

翌日、伊豆大島に向かう。

往路と同じさるびあ丸だが、伊豆大島まで3時間40分なので個室の必要もなく、復路は 2 等椅子席にした。新しい船なので機能満載で、リクライニングはかなりの角度まで倒せて、オットマンやフットレストもついている。前後左右の席との間に目隠しをするロールスクリーンもある。

【さるびあ丸の 2 等椅子席】

2 島目を伊豆大島にした理由は、私たち夫婦はこの島のあるペンションの手伝いを約 10 年間続けてきたので、伊豆大島のことは知り尽くしているからだ。

さらに言うと、九州や北海道など遠方の人で神津島を知っている人は少ないが、伊豆大島は多くの人が知っている。都はるみの「アンコ椿は恋の花」で歌われた「波浮の港」、映画「ゴジラ」では噴火する三原山火口にゴジラを誘い込み落下させた。

従って土産物を渡すにも土産話にも花が咲き、伊豆諸島全般の土産物もそろっている。

■大島温泉ホテル

伊豆大島に着いてレンタカーを借り、今宵の宿「大島温泉ホテル」にチェックインする。

伊豆大島と言えば三原山、その山体が伊豆大島と言っても過言ではない。三原山は二重カルデラ火山で、そしてこのホテルはカルデラの外輪山の一角に建っている。従ってホテルから三原山を眺めることができる。それは露天風呂からも見えるので、三原山を臨む露天風呂がこのホテルの売りになっている。

【大島温泉ホテルの露天風呂から三原山を臨む】

伊豆大島産の椿油で揚げる「椿フォンデュ」がこのホテルの名物料理だが、旅の 3 日目の夜ということで胃は結構疲れており、油は胃に負担をかけるから今回は「金目鯛のしゃぶしゃぶ」をいただく。

伊豆半島先端の下田港が金目鯛の水揚げ第 1 位の港で、伊豆大島は下田のすぐ近くなのでここでも金目鯛は多く獲れる。

このホテルは東海汽船が経営しており、株主優待で 2 食付宿泊費が半額になる。さらに夕食時には 1 ドリンクサービスも受けられる。

【大島温泉ホテルの夕食　金目鯛のしゃぶしゃぶ】

■勝手知ったる伊豆大島

翌日は船の出港までレンタカーで島を巡る。やや駆け足にはなるが、半日ほどで伊豆大島を一周して多くの名所を見ることができる。

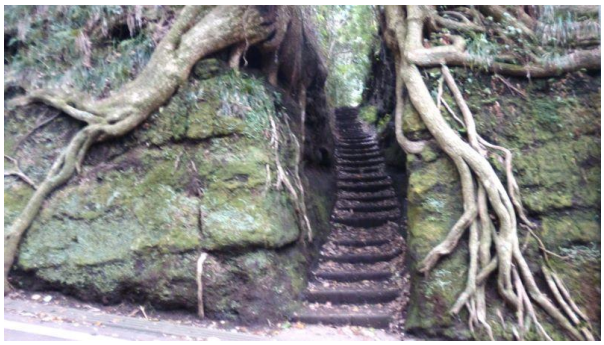
川端康成の「伊豆の踊子」の中で、主人公の青年が伊豆半島を旅している時に出会った踊子たちは伊豆大島の「波浮の港」から来た旅芸人一座だった。波浮の港の「旧港屋旅館」は、その踊り子たちが躍る様子を人形によって再現させている。そしてこの施設は無料で公開されている。

もちろん小説の世界なので、そんな一座は実在していないが、伊豆大島と伊豆半島の結びつきが感じられる。

【波浮の港】

【旧港屋旅館の人形】

インスタ映えで有名になった「泉津の切通し」、地元ではバウムクーヘンの愛称で親しまれている「地層大切断面」、筆を立てたような奇岩「筆島」、海に向かって豪快にショットする「大島リゾートゴルフクラブ」、椿の花が少し咲き始めた「椿公園」、2013 年の大雨による土砂崩れで 39 人もの犠牲者を出してその慰霊碑のある「メモリアルパーク」、夕日がきれいな「サンセットパームライン」などを見て回る。



【泉津の切通し】

【地層大切断面】

【筆島】

【大島リゾートゴルフクラブ】

最後は伊豆大島では予約の取り難い食事処「紀洋丸」で、名物「べっこう丼」を食べて打ち上げにする。

伊豆大島はかつて静岡県だった。静岡と言えばワサビだが、島では水にこだわるワサビは栽培できない。そこで青唐辛子を醤油にとかしてワサビの代わりにした。その醤油に漬け込んだ白身魚を“べっこう”と呼んでいる。

べっこう丼以外に明日葉の胡麻和え、ムロアジのタタキ揚げもこの島ならではの食べ物で、もちろん美味い。

【左がべっこう丼　中央上が明日葉とタタキ揚げ】

■帰途

私が企画する旅の多くは、あるいは気の利いた旅行会社のツアーは、行きと帰りの交通手段を変えるという工夫をしている。

行きは時間をかけてゆっくり行くことで、これから始まる旅を盛り上げる。帰りは思い出をそのまま持ち帰るようにさっと帰るのが常とう手段になっている。

今回の旅も例にもれず、帰りは大型船さるびあ丸ではなく、ジェット船「大漁」に乗って竹芝桟橋に戻る。

あまり知られていないが日本の離島に多く就航しているこのジェット船は NASA（アメリカ航空宇宙局）が開発したもので、時速 80km で海上を滑空するので 1 時間 45 分で竹芝桟橋に到着する。

【大型貨客船「さるびあ丸」】

【ジェット船「大漁」　東海汽船 HP より】

遠方から来た人はもちろん、関東在住の人でも馴染みがない今回の旅は変化に富んでいて、満足できる旅になった。

この行程をトレースする旅もなかなか面白いかもしれない。

■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。何が良かったとか悪かったとか、あれこれ話し合って評価項目を 5 段階で評価し、委員会として評価値を算出する。ただし今回は私 1 人の意見で決定した。

評価項目は泉質、風呂、料理、コスパ、サービス、建物・部屋、立地環境の 7 項目で、平均値を総合点としている。温泉は泉質と風呂で分けており、立地環境はかつて秘湯度という項目だったが、都市型の温泉もあるのでロケーションや景色を総じて評価するようにした。

評価基準は 5 段階としてその定義は、5 は驚き感動、4 は普通に良い、3 は可もなく不可もない、2 は普通に悪い、そして 1 は失望落胆としている。

神津島「山下旅館別館」は泉質 3、風呂 4、料理 5、コスパ 4、サービス 4、建物・部屋 4、立地環境 4、総合点 4.00 になった。前回の 3.79 より評価が上がったのは料理とコスパが良かった。

湧出温度は 44.4℃、pH8.1、ナトリウム-塩化物強塩泉（高張性・高温泉）だった。

伊豆大島「大島温泉ホテル」は、泉質 4、風呂 5、料理 4、コスパ 5、サービス 3、建物・部屋 3、立地環境 5、総合点 4.14 になった。株主優待の 50%割引を含めてコスパを評価した。

湧出温度は 84.2℃、pH 6.9、泉質は低張性、高温、単純泉だった。

■旅の記録

実施は 2024 年 11 月 3 日（日）～6 日（水）3 泊 4 日の旅の行程を示す。

・1 日目　10 時にホテルで TOU さんと待ち合わせし、12 時羽田空港で TOU 奥さん、四谷駅で私の妻と待ち合わせし、13 時 00 分に迎賓館赤坂離宮到着、16 時まで迎賓館見学
地下鉄で清澄白河に行き、食事処「釜匠」で昼食兼夕食、浜松町の「日高屋」で一杯
22 時 00 分竹芝桟橋発「さるびあ丸」乗船し特等室にて就寝

・2 日目　朝 6 時に伊豆大島、そして利島、新島、式根島を経由、
朝食は昨日購入してしたサンドイッチで済ませ、10 時に神津島に接岸し上陸、
「山下旅館別館」の送迎バスで旅館に行き、荷物をおいてタクシーで「多幸湾」、
村営バスで港に戻り、「よっちゃーれセンター」食堂で昼食、再度タクシーで移動
「赤崎遊歩道」、そこから村営バスで移動し「温泉保養センター」で入浴、
宿に帰り夕食

・3 日目　10 時 30 分に神津島発のさるびあ丸 2 等椅子席に乗船、昼食は船内のレストラン
14 時 10 分伊豆大島着、レンタカーを借り伊豆大島巡り（椿公園、泉津切通し）、
16 時「大島温泉ホテル」着

・4 日目　9 時に宿出発、再び伊豆大島巡り（三原山登山口、大島町メモリアル公園、
地層大切断面、波浮の港、筆島、伊豆大島リゾートゴルフクラブ、ぶらっとハウス、
サンセットパームビーチ）、元町港でレンタカー返却（放置）、
タクシーで「紀洋丸」に行き昼食兼打ち上げ、タクシーで元町港に戻り
14 時 45 分のジェット船に乗り、竹芝桟橋 16 時 30 分着、浜松町で解散、19 時帰宅

1 人当たりの費用は約 6 万円（正確には 59330 円）になった。詳細を以下に示す。

・宿泊費　35972 円（1 人当たり）
東海汽船さるびあ丸の特等室　15660 円（食事なし、株主優待で 35%割引後）
山下旅館別館　12512 円（2 食付、夕食時の飲み物代含）
大島温泉ホテル　7800 円（2 食付、夕食時の飲み物代含、株主優待で 50%割引後）

・交通費　13175 円（1 人当たり）
東海汽船さるびあ丸　0 円（竹芝桟橋→神津島　宿泊費で 15660 円計上済）
東海汽船さるびあ丸　1250 円（神津島→伊豆大島　株主優待で 35%割引後）
東海汽船ジェット船　6350 円（伊豆大島→竹芝桟橋　株主優待で 35%割引後）
神津島タクシー563 円（港→多幸湾　2250 円/4）
神津島タクシー588 円（港→赤崎遊歩道　2350 円/4）
神津島村営バス　600 円（1 回 200 円×3）
伊豆大島「JS レンタカー」1875 円駐車場（免責保険含む 1 台 7500 円）
ガソリン代　504 円（1 台 2024 円　1 リッター212 円）
伊豆大島　タクシー　445 円（港⇔食事処「紀洋丸」往復　1780 円/4）
東京都内の地下鉄や JR 移動　約 1000 円
自宅から東京都内までの往復交通費　約 2000 円

・昼食　　6383 円

清澄白河「釜匠」　1593 円（4 人でビール代込 6370 円）

よっちゃーれセンター食堂　1300 円（1000 円定食＋4 人でビール 2 本）

さるびあ丸のレストラン　1200 円（島海苔ラーメン）

食事処「紀洋丸」　2290 円（ビール代含む）

・その他　1800 円

温泉入浴　800 円（神津島温泉保養センター）

酒代　約 1000 円（1 人当たり　日高屋や缶ビールなど）